

# 大東不<sup>レ</sup>レ長

&gt;4&lt;

## 萌える緑

つい一ヶ月程前、絢爛

ヌギは昔は燃料源として薪

植生なのである。

(けんらん)さを誇つてい  
た桜花もあっけなく散つ  
て、今は葉桜。一抹の淋し  
さを打ち消すかのように、  
緑の樹冠から射し込む光は  
意外に強く、若葉のみずみ  
ずしさがひときわ印象的で  
ある。まさに緑萌える季節  
である。

炭に利用され、龍間にはそ  
の名残りの炭焼窯が今も残  
っている。しかし、エネル  
ギー源の変遷により、現在  
木として利用されているに  
すぎない。

今こそ郷土の緑づくりに生  
かされるべきである。町中  
の自然、街路樹も美化とし  
てのみではなく、郷土の素  
顔として、市民の持続的な  
生存と文化の基盤となつて  
欲しい。

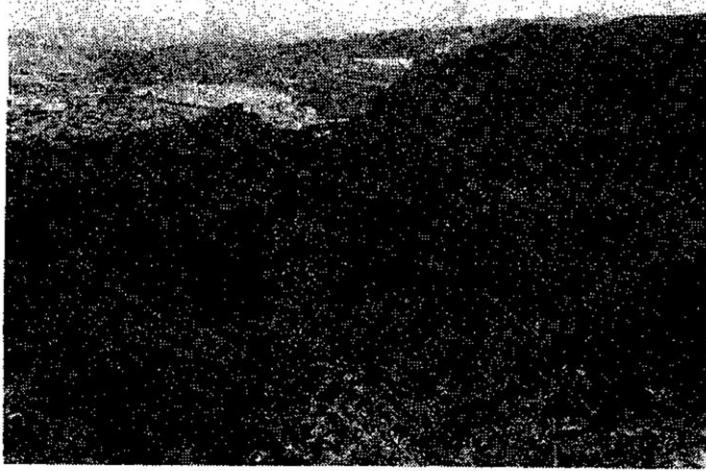
近年、緑の効用について  
は盛んに取り上げられるよ  
うになつたが、それのみに  
生き物の靈長「人間が文明の進  
歩と人間社会の発展を誇つ  
たとしても、生物社会に生  
きていく限り、主役はやは  
り緑である。ここ一ヶ月ば  
かり、限りなく明るい緑の  
生命力に驚嘆し、改めて感  
目が奪われ、生態系の中で  
じたことである。

そこで、今回は本市の貴  
重な自然飯盛の緑の主役た  
ちにスポットをあてながら  
「緑あれこれ」について語  
つてみたい。

冬に東の山並みを眺めて  
すぐには気がつくことは落葉  
樹の多さである。とりわけ  
コナラ、アベマキ、クヌギ  
は飯盛山系の主といつても  
いいだろう。いずれもブナ  
の仲間で秋にはどんぐりを  
つけるので存知の方も多  
いはずである。コナラ、ク  
テ、二次林とよばれる代償  
が生育していたことを物語  
る。従つて、現在私たちの  
糧農業機関が提唱した「國  
際森林年」である。人間の  
未来が緑の地球なくしては  
ありえないという理念は、

このようにかつては里山  
の緑は一種の経済林であ  
り、土地の人によると、現  
在の山の緑の主役は戦後  
間にスパートをあてながら  
「緑あれこれ」について語  
つてみたい。

図によると、このあたりは  
間もない時期に造林された  
在の山の緑の主役は戦後  
間に造林されたばかりの  
もののがかなりあるとのこ  
と。ちなみに潜在植生分布  
図によると、このあたりは  
かけがえのない郷土の緑に  
況にあっても、飯盛の緑は  
そのままの植生ではなくて  
も、自然の植生が許す範囲  
内で比較的安定した代償植  
生、それが現在の飯盛の緑  
である。



かけがえのない郷土の緑「飯盛山」